

地震計博物館拡充に向けた取り組み

○宮川幸治（東京大学地震研究所 技術部総合観測室）

はじめに

地震計博物館とは、地震研究所 2 号館 B18 号室にある、以前は「地震計展示室」と呼ばれていた部屋のことである（図 1）。その始まりであるが、当初は萩原尊禮・表俊一郎・高木章雄・村内必典・茅野一郎・唐鎌郁夫らが今よりも規模の大きな「地震計博物館」構想を立ち上げ、各大学に地震計現存調査をしたが、場所・資金等の先が見えず立ち消えとなった。それでも規模を小さくして地震研究所内で地震計展示室を作り、茅野一郎・唐鎌郁夫らにより展示機器の収集や配置、展示物説明パネルの作成等が行われ、また地震計展示室パンフレットも 1986 年には作られていた（唐鎌郁夫氏、私信）。

地震計展示室のパンフレットは 2013 年に大きく刷新されるが、その時に表紙のタイトルを「東京大学地震研究所 地震計博物館」とした。地震計博物館という呼び方は、この頃には一般的となった。

地震計博物館は、展示物の大きな更新がないまま長く利用されていたが、説明パネルの劣化が進み、また展示物も数が多く雑然として来ていた。そこで 2015 年に酒井慎一・宮川幸治・渡邊篤志・福井萌などが中心となって模様替えを行い、説明パネルやパンフレットの更新も行った。その際に、展示品は地震計のみで構成することとし、展示品数も 3 割ほど減らした。



図 1. 地震計博物館（2 号館 B18 号室）

地震研 100 周年

地震研究所は、1923 年の関東大震災を契機に 1925 年 11 月 13 日に創立された。2025 年は創立 100 年となることから、さまざまな 100 周年事業が検討されている。その 1 つに「地震計博物館の展示拡充」があり、その取り組みに参画することとなった。現在、「バックヤード・展示エリアの拡充」と「展示地震計の拡充（萩原式電磁地震計と今村式 14 年型単微動計の収集）」に取り組んでいるので、その紹介をする。

バックヤード・展示エリアの拡充

希少価値のある古い地震計などの機器は年々増えていくが、それらを所蔵するスペースがこれまで殆どなかった。そこで、地震計博物館の廊下向いに位置する 2 号館 B09,B10 号室を、バックヤード・展示エリアとして利用するべく協議を行い、殆どのスペースを利用できることになった。2023 年から 2024 年にかけて部屋の片付けと清掃及び修繕を行い、現在、レイアウトや利用方法について協議を進めている。

南極で使用されていた萩原式電磁地震計 (HES) の収集

展示地震計拡充の検討を進めていた頃に、地震研究所 OB で国立極地研究所名誉教授の神沼克伊氏から、南極で使用されていた萩原式電磁地震計 (HES) 提供の申し出を受けた（図 2）。

HES は、地震研究所の萩原尊禮教授により 1956 年に開発された、電磁式地震計と光学式記録計（フィルムに感光させて記録する方式）からなる装置であり、地震研究所が提供した HES が、1959 年第 3 次日本南極地域観測隊や 1961 年第 5 次観測隊の際に、昭和基地に設置されていた。この度、当時設置された HES 地

震計の水平動（南北成分），及び HES 記録計を譲り受け，2024 年 7 月 5 日に国立極地研究所の保管庫から地震研究所に運搬された。



図 2. 譲り受けた萩原式電磁地震計（HES）の記録部（左）と南北動地震計（右奥），及びアストロコンパスとその木箱（右手前）

約 100 年の歴史を持つ「今村式 14 年型簡単微動計」の収集

価値ある古い地震計について，地震研究所 OB の唐鎌郁夫氏に相談した所「広島観測所に今村明恒が実際に使用していた今村式 14 年型簡単微動計が展示されている筈だ」とのことだった。確かに，広島観測所の玄関付近には煤書き記録方式の機械式地震計が展示されていた（図 3）が，広島観測所は無人化して 10 年以上経過しており，現役の技術職員は誰もこの古い地震計の由来を把握していなかった。

唐鎌氏の助言を元に関係者に当たった結果，この地震計の約 100 年にわたる由来がほぼ判明した。その詳細は（橋本，2025）を参照頂き



図 3. 今村式 14 年型簡単微動計

たい。地震計博物館に展示するべく，2024 年 7 月 18 日～19 日に広島から運搬された。

おわりに

地震研 100 周年に向けて，バックヤード・展示エリアの拡充を進め，また歴史的価値のある HES や今村式 14 年型簡単微動計などの収集を進めた。展示エリアの拡充に伴い，展示物全体の見直し，レイアウトの変更，パンフレットの改訂などが必要となるので，今後進めていきたい。またできるだけ実働展示できるよう，修復作業も進めていきたい。

地震計博物館は，唐鎌郁夫氏らが残して下さったパンフレットや説明パネルのおかげで，展示物の歴史や素性が良く分かり，今もアウトリーチ活動に有効に活用させて頂いている。このような先人の功績に感謝しつつ，現役世代もできるだけ書き残すことで後世に引き継いで行ければと感じた。

謝辞

地震計博物館の拡充に向けた活動は，地震研究所 100 周年事業の助成を受けて実施しています。また運搬作業や片付け作業などは技術部の皆様のご支援を頂きました。深く感謝いたします。

参考文献

地震計博物館パンフレット，
https://www.eri.u-tokyo.ac.jp/wp-content/uploads/2024/03/eri_seismometers_museum.pdf（参照：2025-01-10）。
地震研究所基金，<https://utf.u-tokyo.ac.jp/project/pjt183>（参照：2025-01-10）。
橋本匡・宮川幸治・内田正之，2025，今村式 14 年型簡単微動計の起動器の部品製作とオーバーホール，東京大学地震研究所職員研修会。